

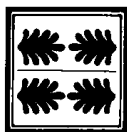
やわらかな
心

吉野秀雄

死をいとい
生をいとい
人の中に
ありて
知る
もの



吉野秀雄 1902年群馬県生まれ。慶応義塾大学経済学部中退。歌人。昭和歌壇に大きな足跡をしるす。1967年病没。歌集に「苔経集」「寒蟬集」「早梅集」「含紅集」「吉野秀雄歌集」(読売文学賞)など。著書に「良寛歌集」「短歌とは何か」「良寛和尚の人と歌」「心のふるさと」等。67年第一回釈迦空賞。没後芸術選奨を受賞。69年「吉野秀雄全集」刊行。



講談社文庫

やわらかな心

吉野秀雄

昭和53年10月1日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製版 株式会社まゆら美研

印刷 東洋印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

© Tomiko Yoshino 1978

Printed in Japan

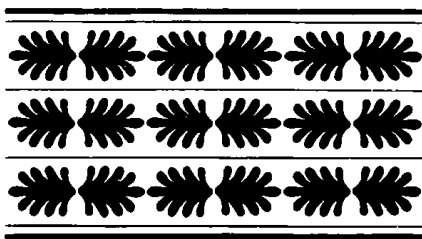
0195-340979-2253(0) 280円

(落丁本・乱丁本はおとりかえます)

講談社文庫

やわらかな心

吉野秀雄



講談社

目次

ふたりの妻と……

前の妻・今の妻……………ハ

宗教詩人八木重吉のこと……………三三

病床に想う

病床独語……………五五

あるがままに生きる……………五八

生のこと死のこと……………六三

歎異抄とわたし……………六五

浅春雜記……………七〇

リユーマチと双眼鏡……………七八

癪と鐘山翁のことなど……………九二

鎌倉・山寺の秋……………九五

わが家の出来事……………九八

わが心の日記……………一〇一

ひとの不幸をともにかなしむ……………一二七

ふたりの師

秋艸道人曾津八一先生 ————— 一三三

良寛——愛と美の真人 ————— 一四二

書のこと歌のこと

書について ————— 一七三

三筆について ————— 一七四

良寛の屏風 ————— 一七九

秋艸道人の書について ————— 一八三

高村光太郎の書と書論 ————— 一八七

歌よみのひとりごと ————— 一九六

写生と伝統 ————— 一九九

沙門良寛の歌の真価 ————— 二〇四

高村光太郎の短歌 ————— 二二七

あとがき ————— 二三七

追あとがき 吉野登美子 ————— 二三八

文庫版へのあとがき 吉野登美子 ————— 二三九

や
わ
ら
か
な
心

ふたりの妻と……

前の妻・今の妻

前の妻はつ子のこと

わたしはことし数え年六十四になった。三年越し病臥しているが、病の一つに足のリユーマチがあつて動けない。そういう境遇のわたしが、この世でもった二人の妻の話を、みやげにもならぬ置きみやげのつもりで書いてみようか。

わたしは上州高崎の生まれで、家は織物の問屋。生来の虚弱體質が嵩じ、慶応経済学部卒業を目前にして胸の病にかかり、それ以後は十年療養してひととおりは落ち着けることができたようなものの、じつはその後も病はずうとつづき、こんにちに至るまで尾を曳いている。あらゆる療法にめぐまれた昨今とは違い、安静・栄養・空気・摂生といった、たよりにならない四原則をたよりにしていた時代で、一進一退難渋をきわめ、特に昭和二年の春、痔瘻手術後大咯血したときは、まさに一命あぶなかった。

そういうさなかの昭和元年、二十五（数え年・以下すべて）のおり、最初の家内のはつ子をめとったというのは、ずいぶん無茶なことのようにだが、ほんとうはけっしてそうでない。学生時代に約束した女性で、病人でもかまわぬからいくといい、まるで看護婦代りに来てくれたのだが、これがわたしにとってどんなに幸運だったか、とてもいいつくせるものではない。わたしはその後、一年はさんで二度も肺炎にかかり、生死の境をさまよったこともあるが、結局凌ぎをつけることのできたのは、まったく家内の献身的な看取りと励ましによるものといわねばならない。

こうしていくらか病気に区切りのついた昭和六年の初夏、わたしは家内と二人の幼な児を連れて、上州から鎌倉のいま住んでいる家に引越した。わたしが三十、はつ子が二十九のときであった。それから二年たって、わたしは、父の経営する店の一つの東京店に勤めることになり、子供は男女四人にふえ、そしてわたしはなおしばしば病氣したとはいえ、以前ほどの大病はなく、はつ子にもだいたい平安とおぼしき日が十年ぐらいはつづいた。わたしの給料は半人前程度だったが、父にもらった多少の財産があつて生活には困らなかつたし、病氣の上でははつ子にひどく苦勞をかけたとはいえ、鎌倉でのこの十年間をおもうと、少しばかりは慰めを感じないでもない。

はつ子は人一倍丈夫なたちだった。わたしのほうが先立つべきことは、自明のものとしていた。そういう彼女が四十をすぎると、胃の潰瘍を病むようになり、土地や東京の医者をめぐり、磯部鉦泉で長く療養し、やっと回復しておよそ一年を経過した昭和十九年の夏、にわかにはわからず、鎌倉市内のS外科に入院させたが、検査の結果胃の中にできた肉腫という難症と判明し、

やがて両肩と右腕への転移も認められ、むはやどうすることもできず、ひと月ともたたぬ八月末、あえなく奪われてしまった。

本人にはむろんしまいまで知らせなかったが、これが別れだという予感があったらしく、家を出る前にとっておきの砂糖であんこを煮、饅頭を作つて子らに食べさせ、日記・手紙類は焼き捨て、覚悟をきめたようすで入院していった。警戒警報の鳴りひびく町に病人をかき寄せた人力車がのろのろと動いていき、そのあとに暗澹として従う者がつまりわたしであつた。

はつ子の入院から死へ、死から百日忌あたりへかけて、わたしの歌は百数十首ある。いまから考えると、どうもやや作りすぎた感じもするが、しかし当時のわたしとしては、歌を詠むことによつて辛うじて自分みずからが救われていたのであり、ことにその死後の歌は、念仏を唱えるかのように口をついて出ることばをそのまま書きとどめておいたものにほかならない。いくつかをここに抜き書きしてみよう。

古畳を蚤のはねとぶ病室に汝がたまの緒は細りゆくなり（一）

病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし（二）

坐りてはをりかぬればぞ立上り苦しむ汝をわれは見おろす（三）

潔きものに仕ふるごとく秋風の吹きそめし汝が床のべにをり（四）

をさな子の服のほころびを汝は縫へり幾日か後に死ぬとふものを（五）

(一)はS外科の病室の實際で、戦時下畳替えなどのできぬ赤茶けた畳を、蚤があらわにとびはねるといふのは、当時一般の平凡事ではあったが、それにしてもこういうところで家内の生命が絶えだえになっていくのは、身にしみるさびしさであった。「汝がたまの緒」はお前の命ということだが、ここを「汝のいのちは」としたら、歌はだめになるであろう。

(二)の「末の子」は数え年九つの女児で、ときどき病院へきて母に甘えようとするが、相手は重病人のため、さすがにベッドの上へあがるのが遠慮され、裾のほうで足頸をにぎって畳にごろ寝するのである。「足頸にぎり」により母と子との恰好が明確になっている点を見てほしい。

(三)は、すでに食欲皆無で熱高く、脈も呼吸もみだれ、寸時も休みのない全身の疼痛にさいなまれる妻を、わたしはどうしてみようもなく、立ちあがってじっと見つめているという歌で、そんなことぐらいがせめてもの愛情の表出であったわけだ。

(四)は、もがき苦しんだあとに、「潔きものに仕ふることく」という一種奇妙なしずけさの漂うこともあったので詠んだ歌であろう。病室は二階にあり、由比ヶ浜の空や扇ヶ谷の山から秋風の吹きそめる頃おいであった。

(五)は、(二)でいった次女の簡単服のほころびを病人が見つけ、ハンドバッグの中から縫糸・針・鋏などを取り出し、寝ながらつくろってやっているところで、女性死の直前にも母性愛を失わぬものかと、感嘆しながらわたしは見ていたのであった。

その時世の空気について一言すれば、——八月の中旬にはサイパン島同胞の全滅が、アメリカ側の報道を材料にして新聞に出、下旬にはパリがいよいよ戦場化そうとして、ドイツ軍は窮地に

追いこまれ、またアメリカの飛行機八十が大挙して、はじめて九州・中国地方を襲うという頃であつた。

提げし氷を置きて百日紅燃えたつかげにひた嘆くなれ（六）

炎天に行遭ひし友と死近き妻が棺の確保打合はす（七）

（六）は、毎日わたし、が氷の配給所へバケツをさげて、二貫目の氷をもらいにいった戻りに、道ばたのさるすべりの花のかげでひと息ついているところだ。また（七）は、道で出会った新聞記者の友だちに、かれが顔のきくのをよいことに、「棺の確保」を頼んだという内容の歌だ。材木の逼迫から、棺の製造は一日いくつと制限され、まだ生きている者の棺をもあつらえねばならぬというむごたらしい世の中であつたのだ。

こうして八月二十九日夜、はつ子は四十二年の生涯を閉じた。その数時間前の事態の歌に、こんながある。

今生のつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり（八）

遮敵燈の暗き燈かげにたまきはる命尽きむとする妻と在り（九）

をさな兄の兄は弟をはげまして臨終の母の脛さすりつつ（一〇）

(八)の歌は、看護婦さんが風呂へいったあと、しみじみと別れを告げ合う時間があつたのできたものだが、空気がガラスのように張りつめた感じでもあり、また地球の引力が突然消えて無重力になったみたいでもあるという、へんな鎮^{しず}もりをしばらくの間経験し、それを「うつろに迫る時のしづもり」といったのだが、人に通ずるかどうかはわからない。

(九)の「遮蔽燈」は戦争中の常備具で、当時のどこの家のだれの気分をも代表しているようないやなものだったが、この夜はとくに、愛する者の死と結びついて、非情な驕^{かげ}りを落としていたことはいままでもない。「たまきはる」は「命」につく枕詞^{まくらことば}で、こんな一語でも、飾ろうとする心でいつているのではなく、哀しみをこめて使っているつもりである。

(一〇)は十五の長男と十二の次男が母の両脚を一本ずつかかえて、さすっているありさまで、弟が昼間の疲れから居眠りするのを、兄は年かさだけに叱って目をさまさせさせ、脛^{すね}をさすりつづけているというのである。ここを「脚」や「足」とせず、に、「脛」といったのは、自分ではおかしいが、けっして此事ではないとおもう。

——総じてこういう悲惨な事象を歌にしようとするわたしの心はどういう心であろうか。事のついでに説明してみれば、悲しみや苦しみに堪えきれずに、その胸中を客観的な形に吐き出す、そうするとそこに微妙な被救済の念がにじみだすのである。こういう場面での歌は、上手・下手の問題を超えて、わたしの魂を歌という形式にぶちつけ、なんとか悲しい傷手^{いたで}に巻きこまれずに——ひとたび巻きこまれてしまえば一首の歌もできなくなる——生きるきっかけにすがりつこうとするものなのだ。いざとなれば歌とはこういうもので、けっしてのんきな遊びごとではないの

である。

さて、はつ子はかの夜わたしにどんなことを告げたか。まず「自分には死後の世界は信じられない。人間はこの世だけで終わるに違いない。そしてこの世に関するかぎり、自分は幸福であつたとあなたに感謝する」といい、つぎに「黙っていてもあなたは子らの面倒をみてくれるに違いないから、いまさら改めて四人の子らをよろしくたのむなどとはおかしくていえない」といい、それからわたしが後に、

生きのこるわれをいとしみわが髪を撫でて最後の息に耐へにき（一一）

と詠んだように、「これから戦争のはげしくなる一方の、この世に生きていかなばならぬあなたや子らは、死んでいく自分よりもはるかにつらいだろう、どうかしっかりやってください」といった。

はつ子は死にぎわに、「あの世はないものだ」と冷静にいきつたが、その点についてわたしはどう反応したかという、あの世がないならば、わたしがあの世をこしらえよう、そこで再び彼女に会うめあてがないとしたら、とてもこの世を生きていけるはずがない。——と、わたしはそうおもつた。

よしゑやし捺落迦の火中きぐるとも再び汝に逢はざらめはや（一二）

「よしゑやし」は、仮にの意。「捺落迦の火中」は地獄の火の中だが、ここは「地獄の炎」では通俗すぎるので、こんな言い方にしたものだ。お前は否定する、それは正しいであろう、だがそれならば、おれは自力であの世をおし立て、それがたとえ地獄だとしても、その地獄の火を掻き分けて会わずにはおかぬぞという歌である。——世間では、あの世はあるかないかなどと、かんとに議論するが、あの世がなくては生きていけぬ人、またはそうした場合にとって、あの世は実在するのであり、どんな達人でもこれを嗤うことはできまいと、わたしはそのときつくづく思い知ったのであった。

もう三首だけ引いておく。——この三首はわたしの歌としていくらか人の記憶にもあるらしく、黙っているのはなにかかくしごとでもするかのようにだからだ。

真命の極みに堪へてししむらを敢てゆだねしわぎも子あはれ（一二）

これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹（一四）

ひしがれてあいろもわかず墮地獄のやぶれかぶれに五体震はす（一五）

これらははつ子が死ぬ前の日の夜のできごとを、百日忌もすぎたその年の暮れに歌にしたもので、回想の歌であるために、「妻」とか「汝」とかいわずに、「わぎもこ」とか「吾妹」とかいふ間接的な呼び方になったしだ。こういう歌を読んで妙な印象をうける人もあらうとは察しら